



JAPAN HERITAGE

日本遺産

国指定史跡



徳島城跡

徳島中央公園

散策ガイド



【蜂須賀家略系図】

—— は実子。 —— は養子。

〔 〕 内は藩主または領主在任期間
※ 正韶、正氏は生没年

家祖 播磨龍野
五万三〇〇〇石

藩祖 阿波徳島
十七万五七〇〇石

初代 阿波淡路両国
二十五万七〇〇〇石

二代

三代

四代

まさかつ
正勝

いへまさ
家政

よししげ
至鎮

ただてる
忠英

みつたか
光隆

つなみち
綱通

〔一五八五〜一六〇〇〕

〔一六〇〇〜一六二〇〕

〔一六二〇〜一六五二〕

〔一六五二〜一六六六〕

〔一六六六〜一六七八〕

五代

六代

七代

八代

九代

十代

つなりのり
綱矩

むねかず
宗員

むねてる
宗英

むねしげ
宗鎮

よしひさ
至央

しげよし
重喜

〔一六七八〜一七二八〕

〔一七二八〜一七三五〕

〔一七三五〜一七三九〕

〔一七三九〜一七五四〕

〔一七五四〜一七五四〕

〔一七五四〜一七六九〕

十一代

十二代

十三代

十四代・侯爵

侯爵

はるあき
治昭

なりまさ
斉昌

なりひろ
斉裕

もちあき
茂韶

まさあき
正韶

まさうじ
正氏

〔一七六九〜一八二三〕

〔一八二三〜一八四三〕

〔一八四三〜一八六八〕

〔一八六八〜一八六九〕

〔一八七一〜一九三二〕

〔一九〇三〜一九五三〕

国指定史跡

徳島城跡

所在：徳島県徳島市徳島町城内

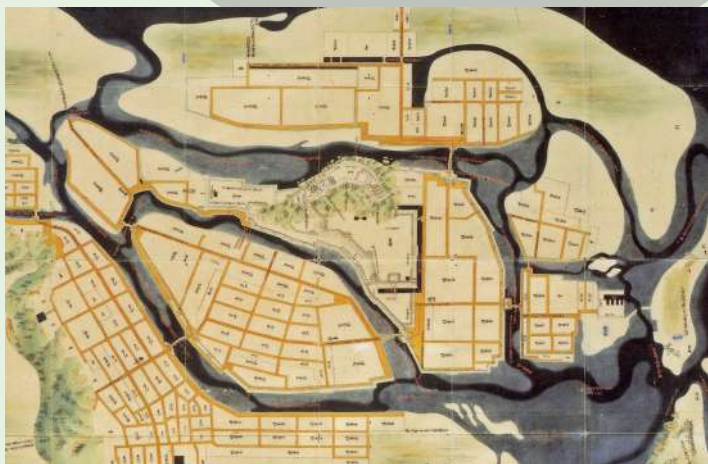
指定：平成18年(2006年)1月26日

徳島城は、もとは渭山(猪山)城・渭津城などと呼ばれ、南北朝動乱期の至徳2年(1385)に細川頼之が築いた中世の城が始まりだったともいわれています。

羽柴(豊臣)秀吉の四国平定が成った天正13年(1585)、17万6千石[※]の領主として阿波に入国した蜂須賀家政は、長宗我部軍が籠城していた一宮城(徳島市一宮町)を最初の居城としますが、秀吉の指示により、紀伊水道に望み海上交通の便に恵まれた渭津を城地として徳島城の築城に着手しました。

築城工事は渭山城と山下にあった寺島城の2城を併合・改築するもので、築城に際しては土佐の長宗我部元親や伊予の小早川隆景、近江比叡山の宗徒らが協力し、翌天正14年(1586)には城の主要部分が完成したといわれています。徳島城はその後も拡張が続けられ、山下部大手筋の石垣などは元和・寛永期(1615～1644)に完成したと考えられています。また築城とともに城下町の建設も進められ、このとき渭津(猪津)の地名は「徳島」と改称されました。

徳島城は、自然丘陵(城山)と周囲を流れる自然河川を巧みに利用した城でした。北の助任川、南の(旧)寺島川、そして人口の水堀(東内堀・旧瓢箪堀)に囲まれた内郭は、山城と御殿が置かれた平城から成っていました。そして東内



阿波国徳島城之図 正保3年(1646)

堀の東側は惣構の外郭が防御を固めていました。山城部分は、標高 61m の城山最高所の本丸を中心に、東二の丸、西二の丸、西三の丸がほぼ一直線に並ぶ連郭式の郭配置であり、これらの郭が主郭の本丸から段々に下って立地する景観は、中世山城に特徴的な「削平段」と呼ばれる遺構の名残であると考えられます。

徳島城の石垣は、五輪塔など一部の転用石を除いてすべて結晶片岩と呼ばれる地元産出の石材が使われており、山城部では家政築城当初の天正期の古い石垣が本丸の一角に残るほか、その周辺部には文禄・慶長期 (1592~1615) の石垣、寛永期 (1624~1645) や元禄期 (1624~1704) 以降幕末頃までの改修石垣など、多様な石垣が残っています。また山下部の旧寺島川の護岸石垣 (惣構石垣) には「舌石」と呼ばれる全国的にも珍しい遺構も残っています。

徳島城は、築城した藩祖家政以降 14 代茂韶までの 280 余年の間、蜂須賀家の居城でありまた徳島藩の政庁でしたが、明治 8 年 (1875) の陸軍省による建物解体に至りその歴史に幕を閉じました。

※ 元和元年 (1615 年) 初代藩主至鎮は、大坂の陣の功績により淡路一国を加増され、蜂須賀氏は 25 万 7 千石の大名となりました。



明治 5 年 (1872) 頃の鷲の門と月見櫓

【徳島城年表】

- | | |
|--------------------|---|
| 天正 13 年 (1585) 8 月 | 豊臣秀吉の四国平定のため阿波に入った蜂須賀家政が 17 万 6 千石を与えられ、徳島城の築城を開始する。 |
| 慶長 5 年 (1600) | 関ヶ原の戦いにあたり家政は所領阿波を豊臣秀頼に返上し高野山で隠居し、徳島城を西軍に明け渡す。
家政嫡男至鎮、関ヶ原の戦いで徳川家康方に参戦、戦後家康から阿波国を与えられる。 |

- 慶長 20 年 (1615) 5 月 大坂の陣の後、淡路国が加増され 25 万 7 千石となる。
- 元和 6 年 (1620) 5 月 幕府の命により勝浦郡中田村に隠居していた蓬庵（家政）が千松丸（2 代藩主忠英）の後見のため徳島城西の丸に移る。
- 寛永 13 年 (1636) 奥御殿が完成する。
- 寛永 15 年 (1638) 2 月 幕府の一国一城令により、徳島・洲本 2 城となる。
- 寛永 19 年 (1642) 7 月 山上の堀 268 間と石垣 349 間半の改築等を幕府に願い出る。
- 寛永 21 年 (1644) 4 月 山上の堀 268 間の改築を幕府に願い出る。
- 正保 3 年 (1646) 11 月 幕府に城絵図を差し出す。
- 正保 4 年 (1647) 5 月 奥御殿を改築する。
- 慶安 3 年 (1650) 8 月 西の丸の蓬庵古屋敷を改築し嫡子因幡（後の 3 代藩主光隆）の屋敷に変えたい旨を願い出る。
- 万治 4 年 (1661) 5 月 鷲の門から水の手門に至る寺島川沿いの道の通行を禁じる。
- 元禄 3 年 (1690) 4 月 本丸異方石垣修復等、同乾方の川筋が埋まったため浚渫を願い出て許可される。
- 元禄 14 年 (1701) 12 月 本丸西南の石垣 6 カ所、外曲輪石垣 2 カ所の修復が許可される。
- 享保 6 年 (1721) 閏 7 月 瓢箪島より出火し花畠屋敷と西の丸の番所が焼失する。
- 享保 7 年 (1722) 8 月 本丸寅卯方の平櫓や同辰方の櫓、同巳方の櫓、同東方の櫓門、この櫓門に架かる小橋、本丸より巳午方の堀を 4, 5 年かけて修復したいという願書を幕府に差し出す。
- 元文 3 年 (1737) 3 月 本丸西之方堀下の石垣、同所続南之方長屋下の石垣等の修復願いを幕府に差し出す。
- 延享 元年 (1744) 4 月 南方長屋下の石垣、同所続き西方堀下の石垣の修復が許可される。
- 明和 3 年 (1766) 5 月 御殿を改築する。
- 安永 9 年 (1780) 9 月 表御殿庭園に御祠堂を建立する。
- 天明 5 年 (1785) 3 月 城の東方の堀川が年来埋まり干潟同然で大火の際消火にも差し支えるので浚渫を願い出ていたが許可される。
- 寛政 11 年 (1799) 3 月 千松丸（斉昌）の武術稽古殿等がつくられる。
- 文化 2 年 (1805) 8 月 御殿を改築する。
- 文化 9 年 (1812) 正月 御殿を改築する。
- 天保 15 年 (1844) 3 月 西の丸御殿が増築される。
- 明治 2 年 (1869) 1 月 西の丸に藩の学問所長久館を開設する。
- 6 月 藩主茂韶、朝廷に版籍を奉還し、徳島藩の知藩事に任じられる。
- 12 月 知藩事茂韶、徳島城を出て南浜御殿に移る。
- 明治 4 年 (1871) 7 月 廃藩置県にともなって県庁は家老賀嶋政範の旧邸に移され、徳島城は無住となる。
- 明治 5 年 (1872) 各地の城郭は陸軍省の管轄となる。
- 8 月 城内で展覧会が開催される。
- 明治 8 年 (1875) 5 月 鷲の門を除く全ての城の建物が解体される。
- 明治 38 年 (1905) 日露戦争戦勝記念事業として徳島城跡に公園設置を計画、同 43 年に「徳島公園」が完成する。
- 昭和 20 年 (1945) 7 月 空襲により公園内の建物が焼失する。

徳島中央公園（旧徳島公園）は、東京の日比谷公園に次いで日本で二番目に造られた西洋風近代公園です。



徳島城跡へのアクセス



J R または バス で

- JR 徳島駅から鷺の門広場までは、線路沿いに南東へ

徒歩約 10 分 (600m)

※ 途中、跨線橋を渡る

車で

東駐車場 (8:30 ~ 18:00 / 10 ~ 3 月)

(8:30 ~ 21:00 / 4 ~ 9 月)



西駐車場 (8:00 ~ 22:00)

有料

- 神戸淡路鳴門自動車道 経由 徳島自動車道「徳島 IC」

から約 10 分 (3.3 km)

- 高松自動車道「板野 IC」から約 25 分 (10 km)

- 徳島自動車道「藍住 IC」から約 20 分 (8km)

案内図

